侍シューゴの異世界探険

げんにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
侍シューゴの異世界探険

【Ｎコード】
Ｎ６４０５Ｕ

【作者名】
げんにゃん

【あらすじ】
ごく普通のチャラそうな少年が突然異世界にやってきたぉ！

1、すっぴんが異世界へ

『はぁ・・・、これは思ったより遠いな・・・』

一人の少年がぶつくさとぼやく。色白なその少年は髪を茶色に染め、俗に言う今風な服をコーディネートして着ていた。その姿はチャラいようにも見えるが、見方によっては好青年にも見えるかもしれない。

『ケータイは今だに圏外か・・・。山奥でもないのに繋がらないってことはいよいよ怪しいな』

今すぐツイートして情報を集めたい少年にとって、ケータイが使えないのは痛かった。

少年の名はシューゴ。
彼は今、右も左もわからない世界にいる。

――――――――――――――――――――

高校生活を快活に過ごしていたシューゴは、ある日、信号を無視してきた車に轢かれた。

シューゴは自分の身体が宙に浮くのを感じながら、声を聞いた。誰

かが叫んだわけでも、自分が呻いたわけでもなく、頭の中に直接響いてきたのだ。

そして身体が地面にたたき付けられたが、そこはコンクリートの道路ではなく石畳の上で、周りの景色も違っていた。

『ここ・・・どこだ？』

訳もわからずしばらく呆けていると、変な服を着た壮年の男が近づいてきた。

『どうした小僧、こんなストリートにいたらカツアゲされちまうぞ。迷ってるんならとりあえず俺についてきな』

シューゴはとりあえずついていった。
アーチのようなものをくぐってしばらく歩くと、壮年の男が再び話しかけてきた。

『ここまでくれば安全だ。ここをまっすぐ行けば宿場街だからそこへ行きな』

シューゴは自分の置かれている状況を思いだし、男に尋ねた。

『ここ、どこですか??』

『なんだ、異国のものか?どうりで見慣れない服を着ていると思った。しかしどこと聞かれてもなぁ。なんせ俺は教養がないから。とりあえず街まで行けば誰かが教えてくれるだろ。じゃあな』

そう言って男は去ってしまった。
仕方なくシューゴは男の言った通り、まっすぐ街を目指すことにした。

―――――――――――――――――――――

『あっ、見えてきた!』

かれこれ3時間歩き続けたシューゴは一目散に駆け出した。とにかく街で休みたかったのだ。

街に着いたシューゴは宿を見つけ、中に入る。入ってすぐのカウンターに人が立っていた。

『一泊10ベースになります』

『ベース??』

ウエストポーチをごそごそと漁ると、入れた覚えのない小さな巾着を見つけた。その中には十数枚の銅貨が入っていた。銅貨には「１０」と書いてあったが、円とは絵柄が違っていた。

シューゴは銅貨を一枚渡し、宿の人に案内されて部屋へ。

部屋のベッドの上でシューゴは考えを巡らせていた。

『たしか・・・車に轢かれたんだよな。そしたら変なところに落ちて・・・。くそっ、情報がなさすぎだろ。そういえばあの声・・・』

轢かれたときに聞いた声は、『ギルドで待ってる』という一言だった。

『ギルド・・・ここにあるのかな？よしっ』

シューゴは街を探索することにした。
街にはビルのような高層のものはなく、背の低い建物がたくさん並んでいた。その中に、一際目立つ大きな建物があった。

『すみません、あの建物はなんですか？』

『あれかい？あれは冒険者ギルドの出張所だよ』

『ギルド・・・！』

どうやらギルドはあれで間違いないようだ。シューゴは足早にギルドと呼ばれる建物へと向かう。

建物正面の大扉の前には、少女が立っていた。少女はショートカットの茶髪にTシャツ、短パン、ニーソックスでボーイッシュな格好をしていた。今まで見た人達と違う感じがしたのは、シューゴと似たような性質の服だったからだ。

少女はシューゴに気づき、駆け寄ってきた。背はそんなに高くない。

『キミ、シューゴだよね？』

『・・・！』

シューゴは驚愕した。その少女の声は、まさに捜していたあの声そのものだったのだ。

2、召喚士がケンカ

『キミ、シューゴだよね？』

『・・・そうだけど、キミは？』

シューゴは少女に問う。なぜ自分のことを知っているのか、もしかしたらこの世界にいる理由を知っているかもしれない。

『自己紹介が遅れたね。あたしはリア。ジョブは召喚士だよ。って言っても最初は誰も信じてくれないけどね』

真っ黒な瞳を持った少女、リアが答える。
しかし、シューゴの疑問は深まるばかりだった。召喚士だって？冗談じゃない、これでは某最後のファンタジーと似たような世界じゃないか。
ただ、信じてくれない、というのはシューゴにも何となく理解できた。彼女、リアが魔導師系の職業だとしたら、服装が普段着すぎてそれらしくない。普通はローブとか神聖（？）なものを着るだろう。しかもなんだかチャラい。

『なあ、教えてくれないか？ここはどこでなんで俺はここにいるんだ？』

とにかくシューゴは現状を把握したかったため、核心に迫る質問をする。

『あ、そうだった。この世界はオプクトゥって呼ばれていて、キミのいた世界の平行世界にあたる。でもその事実を知る人はほとんどいないけどね』

『平行世界？』

『時間の流れを共有してるけど、物理的方法では決して行き来できない関係だよ。世界の狭間を通せばなんとかなるけどね』

シューゴは聞き慣れない単語ばかりでもうクラクラだった。でも一番気になることがある。

『でさ、なんで俺はこっちの世界に来ちゃったんだ？』

『あたしが召喚した！』

『エ？！なんでまたおれなんか？』

『なんか長老さまのお告げで呼ぼうってなったの。詳しいことはまだわかんない』

シューゴは落胆した。

『ま、まあまあ！長老さまに会いに行ったら理由くらいすぐに教えてくれるよ！』

『じゃあすぐにその長老さまに会いに行こう！』

『でもスッゴく遠いよ。いくつか山越えになるし』

シューゴは再度落胆した。あまりに試練が多すぎて自分の体力や精神がいつまでもつかわからない。
しかしいつまでもここにいても仕方ないと思い直したシューゴはついに旅にでる決心をするのだった。

――――――――――――――――――――

『あっ、そうだ。シューゴさぁ、そのまま町の外にでたら即死だよ？』

『へっ？』

とりあえず外へ出ようとしていたシューゴは衝撃の事実に驚いて、派手にひっくり返ってしまった。せっかくコーディネートした服が砂だらけになってしまった。

『じ、じゃあどうすればいいんだ？！』

『いい？この世界の冒険家たちは誰でも一つは「ジョブ」を持って

るの。さっきも言ったように、あたしは「召喚士」よ。ジョブを持ってないシューゴのような状態、いわゆる「すっぴん」のときは基本的に全ての能力値が低いの。例外はあるけどね』

『・・・なるほど。じゃあ俺もなにかジョブを持てばいいのか』

ただ、シューゴは実際にどんなジョブがあるのかは全く知らなかった。その点について、リアが説明してくれた。

『そうだなぁ・・・。シューゴは男の子だから前衛ジョブがいいんじゃない？戦士とか侍とかね』

『侍か・・・！侍がいいな。昔から日本刀で戦うのに憧れてたんだ！』

『オッケー！じゃあコレ、持って』

リアがどこからか取り出したものは刀の鞘だけだった。

『それに念じて！上手くいったら刀が現れるから、そうなったらジョブチェンジ完了よ！』

『念じるって・・・こうかな？むっ！』

シューゴは頭の中に日本刀をイメージし、気合いを込めた。すると

急に鞘が重さを増し、真っ黄色の柄が現れていた。

『ん？なんか黄色いな・・・』

『ほんとだ。こんなの見たことない・・・。まぁ能力はそのうちわかるから、とりあえず出発しよっか』

刀をベルトに差して歩く。町の入口につくまでに市場で携帯食糧を買った。
道中、いかにも冒険家かと思われる屈強そうな人達とたくさんすれ違った。鎧やローブを着ている人達に対してシューゴ達はかなり特殊な服装だったため、かなり浮いていた。リアによると、ギルドがある町には食糧や酒などを求めて冒険家たちが集まるらしい。

そんなことを話していると、４つの大きな影がシューゴ達の行く手を阻む。

『おぅおぅ、お前チビでもやしのくせになにいっちょ前に刀なんて持ってんだよ。荷物全部置いていきな』

４人のでかい男の中でもリーダー格の男が上から見下ろす。男達は体格に見合った大剣や鉄槌を担いでいるから、恐らく「戦士」だろう。
シューゴは思わず刀に手を伸ばすが、リアはそれを制止してウインクをする。ここは自分に任せろ、ということだった。

『ちょっとあんた達、そこどいてくれない？でかい図体が無駄に邪魔なんだけど』

『あん？なんだと小娘！もう一度言ってみな、ただじゃおかねぇぞ！』

『邪魔っつったろ？このウスノロ』

シューゴの背筋に悪寒が走った。リアの醸し出す雰囲気が異常に冷たくなったのだ。目は完全に据わっていて、殺気さえ感じられる。しかし、男達は気づいてないようだ。

『このアマ・・・！やっちまうぞ野郎共！』

リーダーの男が大剣を振りかざし、リアに襲い掛かる。

――ガキンッ！！

リアの右腕を一瞬青白い光が包み、振り下ろされた大剣を腕一本で受け止めた。その手にはさっきまで持っていなかったトンファーが握られている。

『なっ・・・！馬鹿な、この剣は２００ｋｇの重さがあるんだぞ！』

その時、リアの瞳がカッと紅く光った。

『っらあああああ！！！』

男の身体にリアの上段蹴りがめり込んだ。
男は大剣もろとも吹っ飛ばされ、地面に伸びてしまった。

『う・・・うわぁぁ！頭領がやられた！逃げろぉぉ！』

残りの3人はリーダーの男を担ぎ上げ、全速力で逃げていった。

シューゴはあまりの出来事に息を飲むことしかできなかった。そんな彼にリアが声をかける。

『ああいうのがよくいるの。身体だけでっかくてぜーんぜん強くないやつ』

再びリアの腕を光が包み、トンファーが消える。彼女の瞳はもう元の曇りない真っ黒な色に戻っていた。

『なぁ、リアって召喚士じゃなかったっけ？』

『そうだよ、でもただ単に魔物を召喚するだけじゃザコを相手にするときに力を無駄に使っちゃうでしょ？だから召喚技術を応用して武器を呼び出してるの。ちなみに「格闘」アビリティを持ってるから基本能力が高いの』

今の話でシューゴの中の疑問がすっかり解けた。ついでに、ジョブを極めることで他のジョブの時にも能力が反映されることもわかった。恐らくリアは格闘家の経験があるのだろう。
シューゴは学んだ。リアを怒らせると骨の一本や二本ではすまないと。

『とにかく、邪魔なやつもいなくなったことだし、町をでようか』

『そ、そうだな』

町の入口であるアーチをくぐり、シューゴの旅は始まった。

3、侍が迷子

『なあ、リア・・・ここは一体どこなんだ？』

『おかしいわね・・・ジャングルなんて通るはずないのに・・・とりあえず一旦戻って地図を見直しましょ』

『戻るって・・・、どっち・・・？』

シューゴたちは道に迷っていた。３６０度見渡すと全てがジャングルで、その先は木々が密集していて全くと言っていいほど見えない。

『もしかしてリアって方向音痴？』

『ちょっ・・・！そんなわけないでしょ！』

リアは明らかに焦っていた。どうやら図星のようだ。

『とにかく、ここから抜けないと――』

そのとき、シューゴの身体は宙に浮いていた。

『・・・！！？』

シューゴは空中で数百にも及ぶたくさんの足のようなものを見た。それはウネウネとばらばらな方向にうごめき、気持ち悪い動き方である。
シューゴは地面にたたき付けられたが、地面が柔らかいおかげで衝撃はあまりなかった。しかし自分を跳ね上げた原因を見上げた瞬間、シューゴは思わず叫んだ。

『うわっ！！？でっけえムカデ！！！？？』

それはシューゴのいた世界にいるムカデが巨大化したような化け物だった。真っ黒なそれは地面に大穴を開け、そびえたっている。そこはさっきまでシューゴが立っていた場所だった。

『魔物？！こんなところに現れるなんて！でもちょうどいいわ。シューゴ、あの魔物を一人で討伐するのよ！』

『えっ？！あんなにでっかいのを一人でやれっての？？無理無理無理！！加勢してくれよ！』

『甘ったれるんじゃないわよ！初心冒険家はこの魔物を狩ることからスタートするのよ！いわばこいつは一番ザコなのよ！』

確かに、どんなＲＰＧでも一番最初は最弱のモンスターがでてくるものだ。シューゴがよくやっていたゲームもそうだった。それに、

今はコントローラーじゃなく、実際に刀という武器を持っているのだ。

『よし・・・やってやる・・・！』

『あ。ちなみに今目の前にいるやつは通常の5倍のサイズよ』

『俺の決意を返せええええ！！！！っ！！』

突然、ムカデの魔物が穴からはいでてシューゴに突進してきた。シューゴはサイドステップでかわし、振り向きざまに胴へ刀を振り下ろした！

ガキンッ！！

シューゴが懇親の力で振り下ろした刀は容易に弾かれ、不快な金属音と共に後ずさる。

『くぁっ！って、うわぁ！』

シューゴは魔物が放った追撃を身を屈めて間一髪かわした。

魔物の身体は黒い甲冑のような堅硬さを持っていた。シューゴは突

進をかわしつつ繰り返し刀を振るい、金属のような甲殻にダメージを与えるが、少し傷が付くだけで効果的な攻撃とは言えなかった。

『くそっ・・・。硬いな・・・どうすれば・・・？』

『シューゴ！！』

木の上からリアが叫ぶ。

『よく見るのよ！そいつの甲殻は硬くてもところどころ節があるの。そこを狙いなさい！甲殻の下の肉質自体は大したことないわ！』

『そうか・・・！』

シューゴは再び突進してきたムカデをかわし、身体の節を狙って刀を思い切り振り下ろした！

『ここかぁっ！！』

切り落とされた尻尾近くの節からはムカデの体液がふきだし、のた打ち回る。だが、やはり致命傷ではなかった。真ん中か、頭近くを狙わなければダメージは薄い。じきにムカデは勢いを取り戻し、怒りをあらわにして暴れ回りながらシューゴに襲い掛かる。

『うわっ・・・・！』

激しく身体をうねらせるムカデの節を狙うのは至難の技だった。
シューゴは節を狙った攻撃を試みるが、いずれも硬い甲殻に邪魔をされる。
やがて身体に疲労が積み重なり、思うように動けなくなってくる。

『やばいわね・・・。いくらザコとはいえボス級のサイズ・・・。
ジョブを持ってるシューゴでもきつかったようね』

リアは戦況を観察し、そろそろ加勢すべきかどうかの検討を始める。
しかし、シューゴにはほとんど余裕がなく、リアの選択はあまりにも遅すぎた。
ムカデは巨体を立たせ、今まさにシューゴを押し潰そうとしていた。

『シューゴっ、危ない！！』

『くっ、やられるっ！』

――スパッ

突然、一陣の風が吹き、ムカデはその場に倒れて動かなくなった。
見ると、胴は甲殻ごと真っ二つに切り裂かれていた。

『ウソだろ・・・あれだけやって傷しか付かなかったのに、真っ二つだなんて・・・』

あまり出来事にあっけに取られていると、木の上から飛び降りた影が目の前に着地した。
魔物をいとも簡単に切り裂いたその影はリアではなく、頭に獣の耳が生えた一人（一匹？）の少女だった。

4、凶戦士が喰らう

がつがつがつがつがつがつ・・・

『なんだこいつ・・・』

刀を鞘に納めながらシューゴがつぶやく。シューゴの目の前では猫の耳が生えた少女が先程真っ二つに切り裂いた魔物をまさに獣の如く喰らっている。

『リア・・・こいつは一体・・・？』

『まぁ・・・このナリからして、獣人族でしょうね。耳も尻尾も生えてるし』

『それなら聞いたことあるな。って言っても言葉通りの意味だろうが・・・。で、どうするんだ？さっきの魔物が倒されてなんか拍子抜けしちまったんだが』

うーん・・・とリアが考え込む。その間も獣人族の少女はひたすら獲物を喰らう。あんなに巨大だった魔物の肉はもう3分の1ほど無くなってしまっている。物凄い勢いだ。このまま食べ終わってシューゴたちにどんな反応を示すかわからない。

ポン。っと考え込んでいたリアが手を打つ。どうやらなにか思いついたらしく、どこからかトランペットのような楽器らしきものを取り出した。それのマウスピースを口にあて、演奏を始める。だがシューゴの耳には何の音色も聴こえず、ただ「スー」っと息の通る音しか聴こえなかった。

『んにゃ〜・・・』

しばらく演奏を続けるうちに、少女の猫耳がピクリと反応し、動きが大人しくなる。そしてさらにその場にうずくまり、眠り込んでしまったのだ。シューゴは何が起こったのかまるで把握できなかった。

『リア、その楽器みたいなの何だ？』

『これは祖符羅乃（ソプラノ）っていって、獣笛（じゅうてき）の一種よ』

『獣笛？』

『魔物をなだめたり、眠らせたり、あやつったりする道具。例外で攻撃できるようなのもあるらしいわ。あたしは祖符羅乃を愛用してて、これは主に眠らせる効果ね。このあとが肝心なんだけど』

リアは首輪を取り出し、眠っている少女の首に巻きつけた。すると少女は目を覚まし、とろんとした目でキョロキョロしだした。まるでだれかを探しているようだ。

『シューゴ。声かけて、彼女を呼んで。』

『あ、おう。・・・おーいそこの子？』

『！』

少女はこちらに気付き、こう言った。

『キミがあたいのマスターかにゃ？』

『え、マスター？俺がか？！お、おいリア、どういうことなんだ？？』

リアはやっと詳しいことを話してた。リアの話によればどうやらさっき取り付けた首輪には魔物を従わせる力があるらしく、首輪をつけてから最初に声をかけた人間がそのマスターになる、ということだそう。

『よろしくにゃん！』

『あ・・・うん。やべえ猫耳とかリアルに見るの初めてだー。あげぽよー。そういえば、さっきの笛とかもなんかのジョブ能力なのか？』

『そうよ。魔獣使いの基本スキル』

『あ、基本なんだ・・・』

シューゴは弱すぎる自分の力に自信をなくすのみだった。そうは言っても転職してから間もないのだからある程度はしかたないし、何より初心冒険家だから基礎能力が低いのが一番の要因だ。

『キミさ、名前とか能力とか教えてくれないか？』

『あたいは野生だったから名前がないんだにゃ。マスターが付けてくれると嬉しいにゃん！』

『じゃあミズにゃんで』

『即答？！なんかマスターの趣味が入ってる気がするけど・・・まあいいにゃん』

その通り。シューゴが好きなアニメにでてくるキャラクターのニックネームである。野生のワリにはミズにゃんは鋭い猫だった。シューゴは次に能力を把握するために質問を重ねる。

『あたいは獣人族でヒトじゃないけどジョブはもってるにゃ！あたいの種族では皆バーサーカーになるのが掟なのにゃ。武器は元から持ってるこの爪だけど、めいどいんヒトの武器も使いこなせるにゃ！長斧とか大好きにゃ！まっぷたつに叩き割るのにゃん♪』

『おぉぅ・・・。バーサーカーってなんか特殊な能力があるのか？』

『バーサーカーは凶戦士だから基本的には作戦なしで全滅させるまで戦うのみにゃ』

ジョブの性質上、首輪の能力がほとんど意味をなさないような気がしないでもない。しかしさっき魔物を切り裂いた事実を踏まえると実力は確かだし、なによりシューゴが戦いに慣れてない分、勝手に動いてくれるのは好都合といったところだろう。

『ところでマスターたちはなんでこんなジャングルの奥にいるの？』

『ああ。それはな・・・ぐぼっ！』

『それがねー、シューゴが道もわからないくせして勝手にずんずん進むから迷い込んじゃったのよー』

ほんとはリアが先導して迷ったのだが、なぜかシューゴのせいにされてしまう。しかしこのジャングルに住んでいるミズにゃんがいるならじきにここからでられるだろう。

『なんだーマスターは方向音痴なのかー。じゃあ、あたいが出口まで連れてってやるにゃん！』

そう言ってミズにゃんは風のような速さで駆け出した。

5、召喚士はケンカ好き？（1）

『やっと出られたにゃん！』

あまりにも奥に進みすぎていたせいもあり、シューゴ達がジャングルを抜けたのは1時間も経ってしまったあとだった。これから旅を始めるというのにさいさきが悪いことこの上ない。
しかし得たものもあるのはシューゴ達にとって幸運なことだろう。

『まったく・・・だれのせいだよ、こんなに迷ったのは・・・』

『ふ～ん♪』

シューゴは恨めしそうにリアを睨んで見せるものの、当の本人は全く自覚がないようで鼻歌を歌いながら歩いていた。そんなリアは諦めて、シューゴは猛スピードで先行していたミズにゃんに話しかけた。

『ありがとな。あのままだったら来たくもないジャングルで遭難してたところだ。ミズにゃんのおかげだよ』

『そんなそんな・・・！マスターに感謝されるなんておこがましいにゃん・・・。でも、すっごく嬉しいのにゃん！どういたしまして、なのにゃん！えへへ／／／』

ミズにゃんは褒められることに慣れていないらしく、終始耳をぴくぴくと動かして嬉しそうに言った。

『それより、ここどこなの？迷って方向分からなくなっちゃったから地図見てもさっぱりなんだけど』

『たしか近くに町があったはずだにゃん。そこで聞けばわかると思う』

ミズにゃんはジャングルに住んでいたこともあり土地勘があるようだ。
確かに遠くの方に町があることを確認したシューゴ達は、足速に町を目指して歩いていった。

―――――――――――――――――――――

町に着いたシューゴ達が適当な町民から町の名前を聞き出すと、「アルセナ」という町だということが判明した。
リアが地図を取り出して現在地を指差し確認する。シューゴとミズにゃんはそれを覗き込む。

『・・・あった、ここだね。ジャングルに入る前の町はここだからだいぶ東に来てる』

『俺達が目指してるのはどこなんだ？』

シューゴが問うと、リアは５０ｃｍ四方の地図の上で指をススッと動かし・・・

『ここ』

と言うと同時に４５ｃｍ動かしたところで止めた。

『地図の端と端じゃねえかっ！？』

そこは最初にいた町よりずっと西にあって、シューゴが思わずツッコミを入れてしまうほど遠かった。地図を改めてよく見ると前にリアが言った通り、山脈をいくつも横切るような地形だった。

『はあ・・・』と溜息をつくシューゴはこの世界に来てから落胆しっぱなしである。

『なによお。全国地図じゃないだけありがたいと思ってよ。この地図はシンフォック地方だけだからまだましなんだってば』

『地方とか言われても俺には規模がわからないからなあ。俺のいた世界でどのくらいかわかれば少しは・・・』

『あ、シューゴのいた世界なら何度かコンタクトとったことあるから距離感なら少しくらいわかるよ』

『ほんとか?!これってどのくらいの距離なんだ??』

『そうだなぁ・・・。日本の本州くらいの距離かな?』

シューゴは『はああ・・・』とさらに深い溜息をついた。ごく普通の高校生だったシューゴが、本州の端から端まで歩いて旅したことなど、もちろんあるはずがない。そんな未体験を今からやろうというのだから、シューゴが落ち込むのも無理はない。

――――――――――――――――――――

そろそろ日も暮れそうなので、シューゴ達はこの町で宿をとって一泊することにした。今からまた西に向かってもやる気がそがれるだけである。何と言ったってまたあのジャングルを通ることになるのだから。

所持金がそんなにないことを考えて安めの宿に泊まることにしたシューゴ達がそこに入ると、屈強な男達十数名が若い青年を脅している真っ最中だった。

『なんでわからないかねえ。こんなさびれた宿じゃあ客なんてこねえし土地の無駄なんだよ。さっさと立ち退いてくれや』

『そんな・・・。ここは父さんから受け継いだ大切な・・・』

『ガタガタ言ってんじゃねえよ!!』

『ひいっ!?』

シューゴは面倒なことに巻き込まれまいとその場を去ろうとしたが、リアが大声をあげたのでそれは不可能となった。

『おい！そこの！そんなに好きにしたいんだったらあたしを倒してからにしろ！』

『あぁん？だれだおめえ？！』

男達は少しばかり驚いたものの、小さな女の子相手に怯むことなど当然なく、むしろテンションが上がってしまったようだ。青年を脅していた男が仲間達を盛り上げ、士気を高めていく。
しかしリアはそれと同調するように高笑いを上げ、さらに男達を挑発していく。

『ひゃっほおう！！シューゴ、いっちょやるよ！！』

『（ああ、凶戦士が2人もいるよ・・・）』

シューゴは、ヌンチャクを召喚して狂ったように突撃する紅眼のリアとテンションに任せて暴れるミズにゃんに仕方なく続くのだった。

6、召喚士はケンカ好き？（2）

ボロボロ宿での騒ぎが収まったのは5分後だった。リアにとって男十数人くらい大したことはないようで、シューゴとミズにゃんが加勢したとはいえほとんどの敵を一人で倒してしまっていた。時には3人から同時に攻撃される場面もあったが、そんなことも関係なく腕力に任せてなぎ倒していた。

『なんだ、見た目程じゃなかったわね』

『それはリアが見た目によらず強すぎるだけだと思うけどな。あ、ミズにゃん、そいつらは食べちゃダメ。お腹壊すよ』

『突っ込みどころが違うでしょ』

ミズにゃんに関しては動きが変則的かつ速すぎるのでよくわからないのである。今回は人間相手だったからか、あの魔物をいとも簡単に切り裂いた鋭利な爪は使わなかったようだ（使っていたら今頃血みどろ旅館である）。

シューゴに関しては・・・相変わらずおぼつかない手つきで刀を振るい奮闘した。しかし慣れないみねうちを使った割には上手くいったようだ。まだまだ修行が必要ではある。

『あ・・・あのぉ～・・・・』

物陰からそぉ～っと出てきたのはさっき男達に脅されていた青年である。どうやら隠れていたようだ。

『お。大丈夫だったか？』

『はい・・・おかげさまで。この宿も守ることができましたし』

『そう。それはよかったわ。それよりここに泊まりたいんだけどいいかしら？』

リアがそう言うと青年はパッと顔を明るくして言う。

『ええ！それはもちろん！どうぞお泊りになってください！ちょうど部屋が空いていたんですよ』

それはやはり繁盛していないということだった。この宿のボロボロさ加減からしてお世辞にも繁盛してますねとは言い難いのは明らかである。

青年はこの宿の主人ということだった。まだ若いのに主人をしている訳を聞くと、この青年の父親、つまり先代の主人が若くして病死し、祖父母に支えられながらも経営を続けていたが祖父母も亡くなり、今は一人で宿をやりくりしているらしい。

従業員もどんどん辞めていき、宿に泊まる人もずんずん減っていき、売り上げもがんがん落ちていった。故に宿はボロボロである。

まあそんな設定はどうでもいいのだ。
シューゴ達は宿に泊まり、一夜を過ごした（変な意味ではない）。
だが寝るまでにどうしてもさっきの連中のことが気になったシューゴ達は町にでて情報をあつめた。すると、男達の正体はこの町に居座っているギャング（シューゴの世界の表現であるが）であることがわかった。

ということで（どういうわけだか）、この町のギャングを掃討することになった。
唐突に決まったことだが、情報はたんまりある。ミズにゃんの情報収集能力は大したもので、ギャングのアジトや推測メンバー数、アジトの場所、警備体制まで調べてきていた。おかげでシューゴ達の作戦会議はサクサクと進み、手順を細かく決めることができた。

『じゃあシューゴはここで煙幕爆弾を使って・・・にゃんはその隙にボスをふん捕まえてきて！』

「にゃん」というのはリアがミズにゃんを呼称するときのニックネームである。本人曰く、長ったらしくて面倒くさいからだそうだ。
作戦と言ってもそんなに難しいものでもなかった為シューゴもすぐに憶えることができた。

『で、リアはどうするんだ？』

『あたしは適当に陽動。雑魚共は気にせずにちゃちゃっとやっちゃえばいいよ』

『捕まえたあとはどうするにゃん？』

『そのあとは・・・あたしがちょちょっとね♪じゃあ作戦会議おしまいっ！』

意味ありげな間を置いて会議を締めると、一人に一つずつ用意してもらった部屋に引っ込んでしまった。シューゴとミズにゃんも部屋に入って準備を始める。

――――――――――――――――――――――――

ごそごそ・・・

――『今度しくじったらどうなるか分かっておるだろうな？』

――『へ・・・へい・・・次こそは失敗しねぇです・・・』

天井裏。シューゴは作戦通りに潜入していた。後は煙幕爆弾を投下するだけだ。

下の部屋ではギャングのボスと思われる恰幅の良い中年男と、昨日の夜に宿を襲った男達のリーダーが話している。

――『いいか？あの土地は絶対に押さえろ。何ならいっそ焼き払っても構わん』

『なんてやつだ・・・！』

シューゴは怒りに奮えていた。ミズにゃんも同様だ。

『じゃあマスター、煙幕お願いにゃん』

『オッケー。それ！』

シューゴは天井にこっそり空けた穴から小さなボールを投げ入れる。煙幕爆弾は地面に着くと同時に爆発し、一瞬にして視界を奪う。

『うぉっ！！な、何だ！何が起こった！！』

ミズにゃんは周りが見えなくても問題無い。騒ぐ声と臭いを頼りに瞬時に人の位置を把握し、音も無くボスに近づく。

『だ、誰か！おらんのか！！ええい、使えん奴らめ！！』

『無駄だにゃん。大人しく捕まるのにゃん・・・』

『っ！！！？』

キョロキョロとしていたボスの喉元にミズにゃんの自慢の爪が突き立てられる。
当然、この部屋には誰も来るはずが無い。外にいる手下達は全てリアが気絶させているし、さっき会話していた男はミズにゃんと共に飛び降りてきたシューゴが拘束していた。

『くそっ、お前ら一体何者だ！！？』

『俺達か？――ただのお人好しな冒険家さ』

――――――――――――――――――――

『ったくよ、ちょっとくらい休んでってもよかったんじゃねえか？』

かくしてギャングを町から追い払ったシューゴ達はそのあとすぐに町を出発したのだった。シューゴには明らかに疲労の色が見えているがリアとミズにゃんは余裕の表情である。

『いいのよ。もともとあの町には用は無かったんだし、長居する理由も無いよ』

『いや、もう一晩くらいいいとおもうが・・・』

シューゴの一泊するという提案はリアが主導権を行使したことによって強制的に却下されたのだった。

『あたいはあんまり室内で寝るのは慣れないにゃん。ほんとは野宿がいいのにゃん』

『早く目的地に着かないといけないしね。それよりシューゴ、あの台詞なに？勿体無いくらいキザでいかにもチャラかったんだけど』

『しょうがないだろ・・・活躍できなかったんだからちょっとくらいかっこつけてもいいだろーがよ』

シューゴは元居た世界にあったものの影響を受けてしまったようだ。本人にとってファンタジーとも言えるこの世界ならあのような痛い台詞も言ってみたくなるものだろう。

『そういえばあいつらのボスで何してたにゃん？』

『ん？ああ、あれね。ちょっと拷問したら金の隠し場所吐いたから少しだけもらったの。ほらね』

そう言ってパンパンになったお金の袋を掲げるリア。

『ちゃっかりしてんなぁ・・・』

それはさておき、シューゴ達は次の町を目指し（来た道を戻ることになるのだが）、西へと向かい歩いて行く。

7、竜騎士の個人教育（1）

『おぉー！今回は大きい町だな！』

西へと向かうシューゴ達は再びジャングルを抜け、その際傷だらけになった身体を休ませるために一番近い町「セドナ」を訪れた。シューゴのいた世界のアメリカにも同じ地名があるのだが、当人は地理は苦手で全く気づく様子もない。

町は活気づいていて、今度はギャングなどの心配もないのでしばらくはゆっくりとできるだろう。中央には市場が広がり、色んな物が売買されている。外からくる行商人も多くいるらしく、貿易も盛んなようだ。

『じゃとりあえずここね』

シューゴ達がまず訪れたのは、町唯一のパブ、つまり居酒屋である。一つしか無いが故、その規模の大きさはかなりのものだった。

『なぁリア、俺未成年だから酒飲めないぜ？』

『何よそれ。未成年とか関係ないじゃん。飲めないんだったらオレンジジュースでも飲んどけば』

『あたいはまたたびジュースがいいにゃん！』

３人は手分けして空いている席を探し、ようやく見つけて席に着き、各々が所望する品を注文した。施設が広い上にほぼ満席だったので時間がかかってしまった。

『で、これからどうするんだ？俺はもうしばらくは町からでて歩きたくないぜ』

『そうね・・・服もボロボロだし、食糧の調達とかもしたいから、しばらくはこの町にいてもいいね』

『何日くらい居座るにゃん？』

『そうね・・・一週間くらいかな』

そこまで言い終わり、残りの所持金残高を確認しようとしたとき、リアが悲鳴にも近いような叫び声を上げた。

『どうした？？』

『お、お金を入れてた袋が・・・無いの・・・』

シューゴは一瞬何を言われたかわからず困惑していたが、すぐに状況を理解して焦りだす。

３人で荷物の隅から隅まで探すものの、持っている荷物は大した量

でもなかったため捜索はすぐに終わり、シューゴとリアはダラダラと脂汗をかく。
しかし少し不審な点もあった。荷物を纏めていた袋に穴が空いた様子はなく、落としたとは考えづらい。そうなると考えられる可能性は自然と少なくなっていく。

『あぁ、それは多分スリですね。こういう大きな町ではざらにあることです』

不意に後ろから声がして驚き、振り返る二人。振り返ったところには鎧を纏った女性が立っていた。その女性は色白で枝毛一つない綺麗な金髪、明るい緑色の瞳を持ち、動作や立ち振る舞いは端正でおしとやかな雰囲気があり、高貴な美しさがあった。しかも、本来ドレスを着るようなその容姿に似合わないだろうと思われる鎧は、見事にマッチしていた。
普通の鎧はゴツゴツとした印象のある無骨なものだ。
しかし彼女の鎧は、鮮やかなブルーで、ところどころが尖ったデザインで鋭いイメージのあるものだった。しかも、身体全体を覆うものではなく、いくらか肌が露出する部分がある。

『あなたは・・・？』

『おっと、申し遅れましたわ。私、ラミアール・カナリエと言う者でございます。長ったらしいので、ラマと呼んでください』

透き通るような声でラミアールと名乗った彼女は背中に身の丈ほど

の槍を背負っており、騎士を思わせる格好だ。どこを見ても目を奪われるような美しさではあったが、シューゴが気を取られていたのは彼女の長く尖った耳だった。

『ラマさん・・・もしかしてエルフ？！』

『ええ、純血のエルフです。このあたりにはあまりエルフは来ないようですから、私のような者は珍しいかも知れませんね』

シューゴはＲＰＧゲームでよく出てくるエルフの本物に会えて感激していた。

『（やっぱり背高いんだなー。思ってたイメージとそっくりだ）』

『あんた、冒険家なの？その鎧からして騎士団員っぽいけど、ここは城下町でもないからね』

一人感慨に浸るシューゴを無視してリアが話しかける。だが話しかけながらもリアの視線はラマの顔より下に向けられている。自分とは違って豊満な・・・胸へと。

『はい、冒険家ですよ、一応はね。皆さんと同じく、各地を旅して回っています』

一応は、という言葉にリアは引っ掛かったようだが、それよりも現在の状況の悪さを思い出しそれどころではなくなった。
なにしろ一銭もお金がないのだ。もちろんパブで注文した分は払わないといけない。

『ここは私がお支払いします。お気になさらないでくださいね、困ったときはお互い様ですから』

『そ、そう・・・？』

――――――――――――――――――――

ラマのおかげで事なきを得たシューゴ達だが、これからしなくてはならないことがある。バイト探しだ。
冒険家を職とする人はもちろん雇われているわけではない。故に給料を貰えるわけがないのだ。だから、冒険家は自らの実力を傭兵という形で売り込み、報酬を貰うのだ。
だが傭兵の仕事もピンからキリまであり、よっぽど大きな仕事でない限り大した報酬は貰えない。しかも、最近ではそのような依頼が少ないのだ。だから今の冒険家は荷物の運搬などを主として働いている。いい方でも護衛程度で、それでもそんなに貰えない。

『なんかいい仕事ないかなぁ・・・。荷物運びみたいな小さいやつじゃ、次に出発するのは一ヶ月後くらいになりそうだよ・・・』

リアがため息をつく。あまり準備せずに町をでてしまうと、次の町に着くまでに食糧や薬が先に底をついてしまう恐れがあるのだ。そ

れでは元も子もない。

『なぁリア、どんなのが報酬が高いんだ？』

『護衛でも国王レベルの人とか、囚人護送、あと特に高いのは魔物の討伐ね』

『あら、それならいい仕事がありますよ』

最後にこう言ったのはパブからずっとついて来ていたラマだ。
ラマが言うには、最近この町のはずれで集団のゴブリンが発見されたらしく、それの討伐だ。町を上げて訪れる冒険家達に声をかけて協力を要請しているようだが、ゴブリンの値段自体はそこまで高いわけではない。

『しかし、そのときはゴブリンが陣形をとっていたという話ですよ。普通、ゴブリンは頭が悪いためそんな行動を起こすわけがないんですが・・・どうやら大量の人数を統率できるリーダーがいるようです』

『でもゴブリンって弱いんだろ？そんなに危惧するようなことでもないような・・・』

シューゴがそう言うとラマは首を小さく振りながら応える。

『いいえ、そうではないんです。確かに弱いですが、あの種は繁殖力が強く、放っておけば一国に値する数になります。そうなれば戦争です。この町など、すぐに飲み込まれてしまうでしょうね』

シューゴはごくりと生唾を飲む。

と、そこで何かが起きた。

いつの間にか周囲は逃げ惑う人々でいっぱいになり、辺りには悲鳴や怒号が飛び交う。

何が起こったのか把握しようと見渡すと、ちらっと小さな人間が見えた――いや、角が生えているから人ではない、おそらくゴブリンだ。

『あれがゴブリン?!』

『そのようです、どうやら思ったより向こうの戦力は増えていたようですね・・・!』

『シューゴ!とりあえず退治しにいくわよ!』

リアの声を合図に全員が散開する。シューゴがさっきのゴブリンに

近づくとこちらに気づいたそいつが振り向く。
シューゴが腰に挿した刀を抜き、両手で構えると同時にゴブリンが手にした武器を振りかざし、攻撃をくりだす！

ガキンッ！！

と音が響く。シューゴは刀身でゴブリンの持っていたこん棒をガードした。
しかし、シューゴの後ろには知らぬ間にもう一匹のゴブリンがいたのだ。シューゴは身動き取れない状況だ。

『くっ！う、後ろだと！』

瞬間、閃光が走り、後ろのゴブリンは真っ二つになった。

『マスター！大丈夫かにゃ？！』

ミズにゃんの出現にうろたえたゴブリンは一瞬だけ力を弱めた。その隙にシューゴは武器を押し返し、ゴブリンを両断した。

『ふぅ・・・死ぬかと思った』

『じゃあ他のやつも片付けるにゃん。今度は後ろにも気をつけて』

シューゴとミズにゃんは多く戦っていると思われる中央の市場へと向かった。

8、竜騎士の個人教育（2）

『てやぁっ！！』

ゴスッ！と鈍い打撃音の後、ゴブリンが血を吐いてその場に崩れ落ちる。
手に握られていたメリケンサックが青白い光を纏って消滅し、腕を振り回しながらリアがぼやいた。

『まったく、数が多いったら。確かにこれ以上増えると戦争ものよね・・・・』

リアほどの実力があれば１０体のゴブリンを同時に相手するくらいは大したことないが、さすがに広範囲を一気に潰すにはそれなりの力を使わなければならない。そんなことを続けていればリアでもバテてしまうのは目に見えている。

『そちらも終わったようですね』

『あ、ラマだっけ？なんとかね。シューゴ達の方はどうなってんのかな？』

『・・・どうやら、合流できたようですね』

シューゴとミズにゃんが遠くに見えた。二人も大量のゴブリンを相手にしていたらしく、かなり疲労の色が見えていた。

『ハァ、ハァ、やっと見つけたぁ～！リア、もう敵はいないのか？』

『バテ過ぎじゃない？そんなんじゃこの先持たないわよ！』

『そんなこと言われても俺、本物持ったのはこっちきてからだしなぁ。せめてこいつの使い方さえわかれば・・・』

シューゴは腰に挿した刀をみつめながらそう言う。
実のところシューゴは、元いた世界で剣道を習っていた経験があるのだ。だから素人よりは刀や剣の扱いは上手いのだが、使っていたのは所詮竹刀である。実物の刀の重さとは差がありすぎる。

『真剣を使った剣術なら私も習ったことがあります。騒動も治まりましたし、なんならこれから指導して差し上げますよ』

『マジか！じゃあ頼むわー』

『では町の外でやりましょうか』

『ちょ、ちょ、ちょっと！なに勝手に決めてんのよ！？あたしも付き添うんだからねっ！』

さっさと歩いて行ってしまったシューゴとラマを追ってリアが走っ

ていく。

『あたいは適当にうろついてるからゆっくりしてくるといいにゃん』

『オッケーわかった』

シューゴが答えるとすぐにミズにゃんは視界から消えてしまった。

――――――――――――――――――――

町の外、草原である。周りには誰もいないため、武器を使う修業にはちょうどいい。
シューゴとラマは互いに向かい合い、５ｍほどの間をあけて立っている。これからラマによる個人教育が始まるのだ。

『シューゴさん、貴方が手にしている武器は「刀」でよろしいですね？』

『あぁ。これはどう見たって『剣』じゃないだろ？』

シューゴは鞘から刀を抜いて見せた。
シューゴの刀は、柄が黄色く刀身が銀色に鈍く光っている。鍔は普通の物より小さく、長さはまちまちである。

『いいでしょう。では始めます。とりあえず型を教えるので、納刀

してください』

『え？型って、構え方のことじゃないのか？それだったらしまう必要ないんじゃ・・・』

シューゴは言われた通りに刀を鞘にしまう。一方ラマは背負っていた長槍を手に持って、バトンチアリングでもするように槍を器用に操り、手慣らししている。
シューゴがどうしたらいいかわからずおどおどしていると、ラマが解説を始めた。

『いいですか？シューゴさんは剣術を習っていたと聞きましたし、先程の戦闘を少しばかり拝見したところ、基本的な振りや体捌きは既に熟練のそれに及ぶか及ばないかの域です』

実際、何体ものゴブリンを斬り捨ててきたし、ジャングルで迷ったときの魔物も、シューゴが人並み以上に動けなかったらとっくにやられていただろう。

『ですから、シューゴさんには「侍」としての剣術を伝授するのです。ご存知の通り、「侍」というのは「戦士」の上位ジョブです。「戦士」の上位転職は力、防御、魔力、そして速技の特化によるものです』

『おいおいリア、そんなの聞いたこともないし、俺は最初から侍だったぜ？』

『知らないわよそんなの。あたしいつも適当に転職してるから』

草原に一本だけある大樹の枝に座っているリアが膨れっ面で機嫌悪そうに応える。さっきからずっと無愛想であるが、その原因のひとつが自分であることにシューゴは気づいていない。

『シューゴさんの場合、鍛えていたおかげか元の能力が普通より高かったようですね。だから既に「戦士」を経験したものだということでしょう』

『へ～俺ってけっこう運動神経いいほうなんだ』

『ここからが本題です。今の貴方のジョブ「侍」とは剣技を極める職、つまり力に頼るのではなく技で勝負するのです。ですから鍔ぜり合いのようなことはしませんね』

シューゴはさっきのゴブリンとの戦闘で、何度か相手の武器を刀で受け止めて反撃していた。ゴブリン単体のは力が弱いため反撃することができたが、自分より筋力のある相手が重量級の武器を使っていたらすぐに潰されてしまうだろう。

『なるほど一理あるな・・・。じゃあ、技と納刀することとはどういう関係があるんだ？』

ラマはそこで一呼吸置いて言葉を続けた。

『侍の主たる技、奥義といっても過言ではありません。それは「抜刀術」です。故に構えは納刀なのです。では一度やってみましょうか』

ラマが話し終えると同時に槍を回す手が止まる。彼女は身の丈よりも長い槍を地面と水平に上段で構え、攻撃の体勢に入った。

『私は今から攻撃しに接近しますので、シューゴさんはそれにカウンターを合わせるように抜刀し、攻撃を打ち落としてください』

『え？嘘だろ・・・』

突然の指示にシューゴがうろたえる暇もなくラマは地面を蹴り、瞬く間にシューゴの喉元に槍先を突き立てる。直線的な動きだがそのスピードは尋常なものではなく、閃光という比喩がぴったりだった。

『は、速・・・！』

『気をぬいてはいけませんよ。私を斬るつもりで来てくださいね』

ラマは一歩引いて振りかぶり、すぐに槍を振り下ろしたが、今度はシューゴが片手で抜刀し槍を弾き返す。すぐに左手を添えて袈裟切

りに振り下ろすが、ラマは体勢を崩しながらもバックステップでシューゴとの距離をとった。

『お見事です、シューゴさん。ではもう一度、練習しましょう』

ラマはニコッと笑顔を作り、楽しむように攻撃を再開した。

―――――――――――――――――――――

『次は１０回です、いきますよ！』

抜刀術の修業は数時間続き、もう日が暮れようとしている。現在４６回目の攻撃である。シューゴの動体視力は回数を重ねるごとに成長していき、抜刀後でもラマのあらゆる方向からくる連撃をことごとく弾き返すことができるようになっていた。

４６回目の今回もラマの１０連撃を順調に受け流し、反撃しようとしたその時、シューゴの体に電撃が走り、さっきまでとは格段に違う高速で刃がラマを襲った。間一髪でガードした彼女の目は驚嘆で見開かれていた。

『！これは・・・』

『な、何だ、今の・・・？』

『!?あれってまさか!』

観戦していたリアが何かに気づいて大樹から飛び降りてきた。ラマも同じく気づいたことがあるようだ。
二人して刀を眺め回し、結論がでたのか、リアが叫んだ。

『あんたの刀、魔力が宿ってるわ!』

魔力の宿る武器。魔武器や魔法剣と呼ばれるもので文字通り武器から魔法が発生するのだが、伝説の賢者に選ばれた職人しか作ることのできない謎の武器である。しかも武器は使用者を選ぶらしく、どういう条件下で魔法が発生するのかもわからないので使いこなせる人はなかなかいない。

さっきシューゴの体を電撃が這ったのは本人も自覚している。だが発生条件がわからず、完全なまぐれだったのだ。

『まさかシューゴさんが魔武器を持っているなんて・・・今の、もう一度できますか?』

『う~ん、だめだわかんね。意識して使った訳じゃないし突然だったから感覚も思い出せない』

『そうですか・・・。まあいいでしょう、シューゴさんが魔武器に選ばれたのなら使い方はそのうちわかってきますよ。さて、もう日

が暮れます。町に戻って休みましょうか』

一行は町に向かって歩きだした。
歴史に残る大事件がもうすぐ起きようとしていることなど知るよしもない・・・。

9、竜騎士の個人教育（3）

町のすぐ近くまで戻ってきたシューゴ達は異変に気がついた。町民達がぞろぞろと門からでていき、隣町へと向かう街道を歩いている。セドナは人口の多い町なため、でていく人数は千やそこらではない。

『この人達、もう日暮れ時なのにどこに行こうというの・・・？』

リアが首を傾げたとき、町の方から走ってきているミズにゃんが見えた。彼女の脚力は大したもので、シューゴの居た世界で「稲妻」に例えられた陸上選手のトップスピードよりもずっと速く、瞬く間にシューゴのそばまで来ていた。

『ミズにゃん、町で何かあったのか？この人達は何で町を出るんだ？』

『それが・・・どうやらこの町は戦場になる可能性が高いらしいから町民に避難勧告がでたのにゃん』

『戦場？！まさかゴブリン共が攻めてくるっていうの？』

ミズにゃんの報告を聞き、リアは声を荒げた。リアはゴブリンが嫌いなのだ。理由は数が多いくせに手応えがないから闘った気がしないのに無駄に疲労が溜まるかららしい。

リアは、ちっ、と舌打ちした。

『そう。駐在兵がゴブリンの偵察に行ったらもうすぐ行動を起こすかもしれないらしいにゃん。それでここは砦を兼ねた討伐軍本部にするって告知があったにゃん。本部は正規軍の将校が仕切るらしいけどすぐにこれる人数が少ないらしくて、冒険家を傭兵として大量に雇うみたいにゃん』

ラマが言っていた戦争が今始まろうとしているのだ。おそらくゴブリンは一国に値する数で攻めてくるだろう。国同士の戦争でないが故、軍から兵を大量に送るのは国としても憚れるのだろう。だから冒険家という有力で安い傭兵を現地調達するのが良いと判断したようだ。聞こえこそ悪いが、仕事の効率が悪い冒険家にとってはいい飯の種なのだから断る理由もない。

『あちらの勢力増強は調査よりもずっと進行が早かったようですね・・・。納得しました。ではこの町の店などはどうなるのですか？』

『戦いが終わるまでは国の直轄施設になるから宿や食糧は提供されるにゃん。マスター達も参加するのかにゃ？』

『もちろん、町の危機なんだから放っておけないだろ』

『あたしがゴブリンを滅ぼしてやるわ！』

『ええ、やりましょう』

４人は休息をとるのも兼ね、出遅れないように準備をするため用意された宿へと入っていった。

――――――――――――――――

戦争の告知がされてから3日が経った朝。始まりは突然だった。

カランカランカランカラン！！

――『敵が来たぞーーっ！』

『おいでなすったわね。やっと暴れられる』

『そのようですね、じっくり待っていた甲斐がありました』

警鐘が鳴り響き、ゴブリンの来襲を告げる。見れば、遠くに大量の影がある。その数はおよそ十万といったところだろう。それに対しこちらの勢力は四千の傭兵部隊だ。この寄せ集め部隊ではひたすら武器を振るい敵の数を減らしていく、とても戦法とは呼べない戦い方しかできないが、相手は非力なゴブリンだからおそらくは大丈夫だろう。

接触まで後３０秒。シューゴ達は円陣を組んだ。

『いい？いくらゴブリンでも油断しないこと。敵の数に気をつけて。

後退命令が出たら無理せずここに戻ってくるのよ』

『よし、わかった！』

『おっけーにゃん！』

『了解いたしました』

『じゃあ、またここで落ち合いましょ。死ぬんじゃないわよ！じゃあ、散！！』

リアの掛け声と同時に４人はそれぞれ違う方向に向かって走り出した。周りの傭兵達も戦いの空気を感じ取り、一斉に敵へと突撃していく。

商業盛んな活気溢れる町が、今や金属音を打ち鳴らす地獄の戦場へと姿を変えた。

先陣をきった強者が一気にゴブリン兵の壁を切り崩していき、陣形が崩れた敵は混乱している。ファーストアタックは成功だった。

―――――――――――――――――――――

『さて、どのようにいたしましょう？』

突撃した傭兵たちの少し後ろでこぼれてきた敵を逃すことなく倒していたラマの周りを、数十のゴブリンが取り囲んで閉じ込めている。どうやら向こうにとっての危険人物としてマークされたようだ。そ

れぞれの手にした武器の矛先は彼女に向いており、いつでも攻撃を仕掛けることができる。

取り囲むゴブリンの壁の後ろには、他より派手目な装備を身につけた一回り大きなゴブリンが指示を出している。ラマは次々と突撃してくる敵兵を一匹ずつ着実に長槍で突き伏せていく。

『やはり敵には兵を統率する指導者がいるようですね。この調子だといくつも大きな隊があるでしょう』

いくら貧弱なゴブリンと言えど、数の多さは侮れない。それに簡単な戦法が加わってしまうだけで圧倒されてしまう可能性が高い。だが、ラマは半端な数や戦法程度で倒されるほどやわではなかった。

リーダーの指示で十数ものゴブリンが全方位から一斉にラマを襲う！だが飛びついた時にはもうそこに彼女の姿はなく、ゴブリンたちのはるか上空へと垂直に跳び上がっていた。
空中で逆立ちした体勢で一瞬静止した直後、槍を真下に向けたラマは真っ直ぐに目標へと向かい落下、その速度は急速に増していく。

『大地の制裁を受けよ！！』

ドゴゴゴゴゴッッ！！！

高速のまま着地し、槍が突き刺さった地面は凄まじい地鳴りと共に砕かれた。
地割れを起こした地面からは壮大な土煙が舞い上がり、それが風で流された時には唯一人、ラマが優雅に立っているだけで他は跡形もなく消えて何もなくなっていた。

『こほん。少しやり過ぎましたか？』

手にした槍の矛先は土属性を表す白いオーラを纏っていた。
今の攻撃で、対象であるゴブリンが一瞬にしてすべて砂塵と化したのだ。

『これが龍騎士の力です、あまり見くびると痛い目に遭いますよ。
さぁ次々きなさい、どれだけいても同じことです』

そう言うと槍を上段に構え、次々と襲いくる敵に対応していく。

――――――――――――――――――――

『てやぁ！はぁっ！いゃぁあああ！！』

最前線にて、紅い眼のリアが猛威を振るいひたすら敵を蹴散らす作業をしていた。その勢いは嵐のようで、遠くからでも絶え間なくゴブリンが吹っ飛んでいく様子が見ることが出来た。

リアは召喚した鎖鎌を手にして、その刃で切り付けるだけでなくそれと同時に他の敵に絡ませた鎖を器用に操って振り回したり、近づく敵をまるで意識していないかのように肘鉄を食らわせるなりハイキックで蹴り飛ばすなりしていて、その全てが一連の動作のように見えた。しかも彼女は一歩も動くことなく、自分の周りに倒したゴブリンの山を作っているのだ。

『まったくもぉ～！これじゃキリがないじゃない！ちょっと疲れるけどアレ使っちゃえ！！』

リアは一旦攻撃の手を止め、鎖鎌で地面に直径１０ｍほどの円を描いた。彼女はその中央で片膝をつき、準備に入る。

『――燃え盛る焔よ、汝に捧げるは我が魔力の火種と業火に焼かれる悪しき思念なり――』

詠唱に伴って地面の円は光輝き、リアを中心として内側に魔法陣が描かれていく。だがゴブリン達は動きが止まった今をチャンスとし、一斉に彼女に襲い掛かる！
だがその時には既に魔法陣は完成されていた。

『いでよ、焔の精霊イフリート！！』

そう叫ぶと、リアの背後には人より一回り大きな筋骨隆々でワイルドなスタイルの男が現れた。その体は半透明だったが、醸し出す威圧感はリアと同じかそれ以上だった。

――詠唱確認！燃やし尽くすぜぇぇぇっ！！――

男が腕を振るうだけで周りには炎が発生し、火柱が上がった。その炎はリアを取り巻く大きな竜巻のように変形し、魔法陣の範囲を焼き尽くす。もちろん襲いくるゴブリンなどは一たまりもなく、近づくだけで身体から発火し、成す術もなく肉が焼かれていく。瞬く間に、周囲は灰の山と化した。

『どう？召喚師をナメると地獄をみるわよ！灰になりたい奴からかかってきな！！』

――――――――――――――――――――

ザザザザザ・・・

戦場全域にて、敵将だけを次々と暗殺している一つの影があった。その影は西で目撃されたりはたまた東で騒動を起こしたりと、予測しがたい動きで戦況を混乱させていた。

その影の正体はミズにゃんだった。単独で動いているために、どち

らの軍にも動きが予測できないが、冒険家側は元より作戦などないため混乱したとあれば攻め入るチャンスだ。同種族同士なら味方を間違えて攻撃してしまうこともよくあるが、今回はゴブリン族が相手だ。よって体格で敵を見分けることができる。

『あ、あそこにも小隊があるにゃん』

ミズにゃんは戦場を目まぐるしく動きまわり、目ざとく隊を見つけては自慢の爪でリーダーの首をはねる。攻撃スピードが早過ぎるが故、ミズにゃんの金属のような鋭利な爪は一滴の血も付着することがなく、切れ味を保っていた。

また一つ隊を見つけ、闇より奇襲を仕掛ける。が、

ガキィーーーン！！

『ほぅ、なかなかのスピードだ。さては、各地で小隊長を暗殺していたのはお前だな？』

今までにない反応スピードで爪を弾き返され、ミズにゃんはそこで初めて動きを止めた。
攻撃を防いだゴブリンは他の隊長クラスのものより大きく、小柄なゴブリン族にしては珍しく２ｍ以上は身長がある。

ミズにゃんは手も使い４足の獣の様な動きで再び攻撃を仕掛けるが、またもや防がれてしまう。そのあとも幾度か繰り返したが、どれも同じく弾き返されてしまった。

『めんどくさいにゃあ～』

『ふん、貴様ごときにこの軍が落とせるものか。我等ゴブリンはこれよりこの世界を制圧し、新たな国を築き上げ、支配者となるのだ』

『うるさいにゃん。もういいからさっさと終わらせてマスターのとこに帰りたいにゃん』

――ガルルルル・・・――

喋り終えたミズにゃんはもはや可愛いげのあった獣人族の少女でなくなっていた。いつもシューゴに手入れされている毛並みは荒々しく逆立ち、目は据わっていた。獲物を狙う目だ。完全なる野生、本来の職であるバーサーカーの状態だ。

凶戦士のミズにゃんは再び大柄ゴブリンに突撃し、それを先程と同じく受け止めるゴブリン。だが、今回は今までとは違っていた。

『何度やっても同じこと――――？』

気づいたときには既にゴブリンの上半身は宙に浮いていた。
ミズにゃんの今までセーブされていた力が解放され、一度は受け止められたものの、強引に振り抜いたのだった。

この後もしばらく凶戦士状態が続き、さらに戦場が混乱することになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6405u/

侍シューゴの異世界探険

2011年10月8日22時46分発行